

## ノ ー ト

新崎盛敏: 故山田幸男先生と日本藻類学会発足の頃 Seibin ARASAKI:  
Starting of the Japanese Society of Phycology and the late Professor  
Yukio YAMADA

山田幸男先生が亡くなられた。岡村金太郎先生のあとを受けつがれて、日本の海藻学の発展に尽されたご功績は、今更云々する要はなかろうし、またこの面については他の適切な方々がおられる筈と思えるので、私は日本藻類学会創立前後の頃の思い出話をここに書いて先生の追悼にしたい。

別掲の写真は岡村金太郎先生の17年忌に当る昭和26年8月21日に、先生の末亡人や遺族を囲んで追憶会をやった時の記念写真である。集まった方達には、海藻、植物学関係で先生のご教導を受けた者達だけでなく水産学界の先生達も加わっており、岡村先生のご活躍なされた分野の広さを偲ばせるものがあった。それはとに角として、その時分、絶版になって年数も経ていた岡村先生の日本海藻図譜(7巻)を風間書房が再刊することになり、印刷完了も近づき刊行を待たばかりの時分であったので、風間書房主人も参席された。日本海藻図譜(7巻)が風間書房から再刊されるに到るまでの事情には面白い裏話がある。何でも、岡村先生のご長男一郎氏(故人)と風間書房主人とが昭和25年末頃か昭和26年初め頃かのある日、ある酒席で偶然隣り合せになったことがあった



故岡村金太郎先生17回忌の会合の記念写真(昭和26年8月21日撮影)。

前列左より岡村一郎(岡村先生長男)、妹尾秀実、三宅先生、岡村先生末亡人、羽原又吉、田内森三郎、徳久三種、中列左より岡村先生次男、原田三夫、恩田経介、国枝 薄、石川光春、雨宮育作、東 道太郎、後列左より一人おいて風間書房主人、多湖実彌、小南 清、向坂道治、山田幸男、瀬川宗吉、新崎盛敏、須藤俊造の各氏

由。お互いの身分を判明させ、話が進んだ時に、一郎氏が“私費出版だった図譜の絶版になっている”話を持出したら風間書房主人が“そういう学術上重要な物が埋もれてしまうのは惜しい。版板が残っているなら、収支を度外視して出版しよう!”ということになったが、終局的にはこの種の出版物に長い経験をお持ちの三宅驥一先生と向坂道治先生のもとに話が集約された。両先生が中に立たれて、一郎氏の手許や山田教授の手許に残されていた版板がかき集められて刊行されるようになり、最終的の話が決った頃に、前述の岡村先生17年忌の集会の話しが持出された。案内状を出したら予期以上に多数の方々のご出席され、特に山田先生はこの会合出席だけの目的で北海道から上京されるというご熱心さであった。

ところで、その話が持ち上がる少し前、多分昭和25年の8、9月の頃だったかと思うが、鹿児島から田中剛博士が上京されて筆者の研究室を訪ねられたことがあった。その時、田中博士が“ノリをはじめ海藻類の利用が欧洲諸国でも注目され出しており、日本でも研究者もふえ、この分野の学的立場もしっかりしてきた。菌類の方では一つの独立会合を持つようになっているから、藻類の方でも作って見たらどうだろうか。若い者が固まれば何とかなるだろう。山田先生と北大関係の方は私の方から話をつけておくから、水産関係や東京方面は貴君の方に頼む”との話を持ち出された。当時、英国の方から第1回国際海藻学会議の案内が来ていた時分でもあり、国内では若い者（25年も前のことだから今では一同老人といわれる年代層に組入れられる年令になっているが）が何とか現状を脱したいという気になっている時分だったので、話しは割合円滑に進められて行った。前記の岡村先生17年忌の集りの際にも、山田、瀬川、須藤の諸氏と話し合い、山田先生も最終的に決心されたようだった。それが今日の日本藻類学会が生れる前段階だった訳である。結局は会長の座をはじめ会務全般も引受けざるを得なくなるような責任ある立場にあった山田先生としては、見切り発車でも良いではないか！とでも云えるような当時の筆者達若い者のような身軽の言動をされる訳にも行かなかったのであろう。慎重に考えられておられ、なかなか諾！を与えて下さらなかった。けれども、一旦学会が発足すると、会誌発行の経済面の心配までもご自分で当られるなど、学会の基礎づくりに全力を注がれた。岡村先生が「山田君の所には卒論の学生が4人も集ったそうだ!」と、とても愉快そうに話されていたのは昭和8年のことであったが、藻類学会員が600余人にもなった今日の発展は、山田先生の功績に大いに起因している。

(日本大学農獣医学部水産学教室)